

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24593365

研究課題名(和文)胎児診断された先天性心疾患児の母親の心理過程と親子関係に関する縦断的研究

研究課題名(英文)A longitudinal study on the psychological state of mothers and child-parent relationship of mothers of fetus diagnosed with congenital heart disease

研究代表者

大井 伸子 (Nohuko, Ohi)

岡山大学・保健学研究科・准教授

研究者番号：60155041

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、妊娠中に胎児診断された先天性心疾患の母親を対象に、妊娠期間中、分娩時、出産後の期間について、母親の心理過程の変化を明らかにし、胎児診断された先天性心疾患の母親に対する妊娠期間中から出産後の支援策を検討することを目的とした。胎児診断された先天性心疾患の母親25人を対象に、縦断的な調査を行った。

胎児診断直後、出産前、出産後の入院期間中、子どもが入院中、子どもが退院後1か月頃の母親の心理状況の変化が明らかになった。子どもや家族の身体的・精神的・経済的な負担は大きく、各時期の母親の心理状態を把握して、多くの職種が連携し、胎児診断後から一貫した看護を提供することが重要である。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at finding ways to support the psychological state of mothers of fetus diagnosed with congenital heart disease, from diagnosis to post delivery. The psychological state of the mother after fetal diagnosis include, immediate confusion; anxiety about cause of disease; blaming one's self for the child's abnormalities, etc. From 36 weeks of gestation until delivery, there was; anxiety related to delivery; anxiety about the child's condition after childbirth, etc. After delivery, there was relief after childbirth; anxiety about the child's condition and giving breast milk to the newborn, etc. The psychological state of the mother in a child's attendance period; anxiety about the life after the baby's discharge; worry about being away from family, etc. The psychological state of the mother after one month from the baby's discharge; anxiety about the child's condition; gratitude to a family, etc.

研究分野：母性看護学

キーワード：胎児診断 先天性心疾患児の母親 心理過程 親子関係 縦断研究

1. 研究開始当初の背景

先天性心疾患と胎児診断された母親は、妊娠中も胎児や自身の出産への不安が大きい。そして、出産後も自分自身が心身の回復に至っていないのにもかかわらず、児の状態や今後の検査や手術に関する不安や心配を抱えながら、気が休まらない日を過ごしている。以上のことから、胎児診断された先天性心疾患の母親に対して、妊娠期間中から、また出産を経て児が姑息的手術を行い、退院するまでの一貫した看護を提供することが重要である。特に、妊娠中から、出産を経て、子どもが一時退院するまでの母親の心理状態を縦断的に解明することにより、看護の視点からいかなる援助が必要か、また可能であるかを明らかにするための根拠となる。

2. 研究の目的

本研究は、妊娠中に胎児診断された先天性心疾患の母親を対象に、妊娠期間中、分娩時、出産後の期間について、母親の心理過程の変化を明らかにし、胎児診断された先天性心疾患の母親に対する妊娠期間中から出産後の支援策を検討することを目的とする。

3. 研究の方法

1) 研究対象者

胎児が先天性心疾患と診断され、0 大学病院で妊婦健診を受けている女性で、以下の基準を満たす者

(1) 0 大学病院で出産し、新生児が NICU または CCU へ入院予定の者

(2) 研究の目的を説明し、同意の得られた者

2) 調査方法

(1) 調査方法は、インタビューガイドに基づいて半構成的面接法による聞き取り調査を行う。1 回の面接時間は 15 分程度とする。面接内容は対象者の同意を得た上で記録を行い、録音の承諾が得られた場合には IC レコーダに録音する。

(2) 記録または録音した内容は逐語録に起こす。逐語録を適当なまとまりごとに分類しデータ化(単位化)する。意味内容に類似性のある複数のデータを集め、グループ化する。グループ編成された各データが包括する意味内容の類似性を示す新しいカテゴリーを作成する。次に新しいカテゴリー同士の意味内容の類似性に従い、さらに抽出度の高いカテゴリーを作成していく。

(3) 面接内容は、現在の心境、子どもへの思い、親としての思い、今困っていること、医療者・病院への要望

(4) 調査時期は、妊娠期間中(胎児が先天性心疾患と確定診断後、妊娠 36 週頃~出産前)、産褥入院期間中、児が NICU・CCU または小児外科病棟へ入院期間中、児が退院後(退院後 1 か月以内)の計 5 回

3) 倫理的配慮は、研究計画書を施設内倫理審査委員会に提出し、承認を得た。対象への

研究の趣旨と倫理的配慮について書面を用いて口頭で説明し、書面での同意を得た。

4. 研究成果

対象者は 25 人であり、初産婦 11 人(44.0%)、経産婦 14 人(56.0%)であった。年齢は 30 歳代が最も多く 18 人(72.0%)、20 歳代 6 人(24.0%)、40 歳代 1 人(4.0%)であった。家族構成は核家族が 22 人、親と同居が 3 人であった。有職者は 7 人(1 人妊娠中に辞めた)、専業主婦は 18 人であった。全員が他の医療機関から紹介されていた。県外在住の者は 15 人(60.0%)、県内在住の者は 10 人(40.0%)であった。

1) 母親の心理過程の変化

胎児診断直後の母親の心理状態については、【診断直後の混乱】【原因への不安】【子ども治療への葛藤】【現実の受け止め】【子どもへの罪悪感】【子どもの他の病気への不安・心配】【命の重さを実感】【将来への不安】【子どもの状態への不安】に分類された。

出産前の母親の心理状態については、【子どもが元気に産まれることへの願い】【子どもに大事な存在と伝えたい】【子どもの救命への期待】【分娩への不安】【子どもの状態への不安】【子どもの治療に向けての決心】【将来への不安】【経済的不安】【家族への気遣い・気がかり】【家族と離れた寂しさ】に分類された。

産褥入院期間中の母親の心理状態については、【出産後の安堵】【子どもが生きていることへの安堵】【少しでも母乳をあげたい】【今後が見通せない不安】【子どもの状態への不安と心配】【今後の検査・手術への不安】【母親になった気がしない】に分類された。

子どもの付き添い期間中の母親の心理状態については、【退院後の生活不安】【他の家族への気がかり】【子どもの育児困難感】【子どもの状態への不安】【付き添いの疲労感】【母親同士の思いの共有】に分類された。

退院後 1 か月頃の母親の心理状態については、【子どもの状態への不安】【家族への感謝】【今後の状態への不安】【子どもの状態への安心・安堵】【育児への不安】【育児困難感と疲労感】に分類された。

2) 母親への支援の検討

(1) 診断直後

診断直後の母親に対しては、精神的な支援が最も重要であり、母親の心理状態や不安を把握するために、説明時に同席する必要がある。また、母親や家族が医師からの説明が十分理解できているかを確認し、理解できていない場合には改めて対応を検討する。特に、心理的不安やストレスの高い母親に対しては、他職種が連携したサポート体制づくりを行い、対策を検討する。

(2) 出産前

分娩が近くなった母親は、予定日が近くなると、分娩をイメージする者も多くみられ、無事に元気に生まれることや分娩への不安や、出産時の子どもの状態への不安、胎児が

心疾患であるという現実を受け止めて、出生後の治療についての決心が示されており、出産後のことやその後の生活がイメージでき、母親の分娩に対する不安が軽減できるよう出産に向けた対応を行う。

(3)産褥入院期間中

出産後、母親は無事子どもが生まれたことへの安心感をもつ一方、子どもが生まれてから検査を行い説明を受けるなかで、今後の心臓カテーテル検査や手術に関する不安や、子どもの術後の不安を示す内容がみられていた。産褥期の母親の状態と、子どもの状態も十分把握して母親への対応を行う。また、医師が子どもの状態について両親への説明を行う場合には、必ず同席して両親の反応や説明について理解できているかを確認する。そして、子どもの状態についての両親の不安や心配が少しでも軽減できるように対応する。

(4)子どもの付き添い期間中

子どもが一般病棟に移り、子どもの付き添いにつくことになり、母親は慣れない育児を行っていることから、子どもの育児困難感や付き添いへの疲労がみられた。また、子どもはモニターやチューブを装着していることが多く、機器の扱い方や子どもへの育児がうまくできないことで混乱する母親もみられた。母親への支援として、機器についての見方や取り扱い方、子どもの世話をを行う上での注意点について、母親が理解できるように説明する。母親の育児の習得状況に合わせた育児指導を行い、退院が近くなれば、退院後に育児が行えるように支援することや、地域における療育サポートが受けられるように地域につなげていく。また、居住地の保健師や地域でのさまざまな社会資源が活用できるように、病院内でもさまざまな職種の者が連携して関わらなければならない。退院後、家族が安心して子どもを育てていけるよう、また子どもの緊急時への対応がスムーズに行えるように、子どもの状態に合わせた指導を行うことや病院と地域とが協働して対応する。

子どもの付き添いにつくことは疲労が予測されるので、母親の出産後の状況や疲労にも注目して、母親の疲労が強い場合には少しでも休息がとれるような支援を行う。

そして、母親たちは同じ境遇の母親たちと話をすることによって、精神的に支えあっていることが明らかになった。同じ心疾患を持つ母親同士がお互いにピアサポートが行えるような、場の提供などの工夫が必要である。個人情報に注意しながら、母親同士が話を行えるような環境づくりを行う。

(5)児が退院後1か月頃

退院後の検診では、子どもの状態の診察結果が説明され、それによって母親は不安になったり、安心できていた。退院後の検診時には、子どもの状態や育児状況を確認し、母親が何に不安や疑問を持っているのか、子どもの育児で困っていることを具体的に聞くこ

とが重要であり、その内容や子どもの状態に合わせた指導を行う。

退院後、母親は子どもの状態に気を配りながら日々張り詰めた状態で育児を行っており、育児への不安や困難感や疲労を感じている。以上のことから、母親のがんばりをねぎらい、できるだけ育児を楽に行う工夫を母親と共に考え、これから長期間子どもの心疾患に対応していかなければならないこと、成長と共にひとつひとつを乗り越えていかなければならない状況を理解して、患児やその家族に関わる。

胎児診断された先天性心疾患の母親に対する研究は数が少なく、母親が妊娠期間中のものや出産直後ものがほとんどである。また、先天性心疾患の母親の心理過程に関する研究は、子どもが入院中ものが多く、ある一時期や一定期間の取り組みといったものが多い。本研究のように妊娠中の胎児診断後から、出産を経て、子どもが一時退院するまでの母親の心理状態について、縦断的に解明されたものはない。

また、先天性心疾患は病状が重篤な児も多く、出生後は検査や手術等で入退院を繰り返すケースがほとんどであり、出生して子どもが退院するまでの期間が9か月以上要する児もいた。子どもや家族の身体的・精神的・経済的な負担は非常に大きく、支援のための研究が今後も望まれる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計7件)

1) 大井伸子,岡本真由美,増山寿,岡本恵,松田奈々,皆川明代,村上英里華:胎児診断された先天性心疾患児の母親の出産後の心理過程,第56回日本母性衛生学会,平成27年10月17日,盛岡.

2) Nobuko Ohi, Mayumi Okamoto, Psychological nursing support to mothers of fetus diagnosed with congenital heart disease from diagnosis to delivery, The ICM Asia Pacific Regional Conference 2015, 2015.7.21.Yokohama,Japan.

3) 大井伸子:先天性心疾患児の母親への母乳育児支援の検討(第2報),第55回日本母性衛生学会,平成26年9月14日,千葉.

4) 大井伸子,増山寿,岡本恵,松田奈々,中村佳恵,田中友紀:胎児診断された先天性心疾患児の母親の出産までの心理過程,第55回日本母性衛生学会,平成26年9月13日,千葉.

5) Nobuko Ohi, A study on tele-medicine support from home with the aid of a mobile phone to mothers of high-risk babies for child care, International Confederation of Midwives 30th Triennial Congress, 2014.6.3.Prague,Czech Republic.

6) 大井伸子,増山寿,中村佳恵,田中友紀:先天性心疾患児の母親への母乳育児支援の検討,

第 54 回日本母性衛生学会,平成 25 年 10 月 5 日,大宮.
7)大井伸子,増山寿,中村佳恵,田中友紀:胎児診断された先天性心疾患児の母親の心理過程,第 54 回日本母性衛生学会,平成 25 年 10 月 5 日,大宮.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

大井 伸子(OHI Nobuko)
岡山大学・大学院保健学研究科・准教授
研究者番号:60155041

(2)連携研究者

増山 寿(MASUYAME Hisashi)
岡山大学・大学院医歯薬学総合研究科・
准教授
研究者番号:30314678